



## 舞台監督と台本

英国では、台本のことをスクリプトやプロンプトコピー（直訳：演出台帳）と呼びます。使う人によって、台本の使い方、きっかけの書き込み方、付箋でシーン分けや、イラストの書き込みなど、人それぞれ違います。日本の演劇の場合、ほとんどのきっかけは、それぞれの部署（照明は照明、音響は音響）が自らGOを実行することがほとんどなので、他の部署のキューが自分の台本に書かれていることはあまりないと思います。英国では、基本的に舞台監督がすべてのキューを全員に出すので、舞台監督の台本には、役者の立ち位置はもちろん、音響、照明、映像、特効、大道具、小道具、吊り物など、それぞれのキューがぎっしりと一冊の台本に書き込まれています。つまり、この舞台監督の台本なしでは舞台が成り立たないので、彼らの台本は、余程のことがない限り、劇場から持ち出してはいけないうのが原則です。いざ、舞台監督に何かがあって不在になった場合、ほかの誰かが代理で、その台本にあるキューを呼ばなければならないからです。

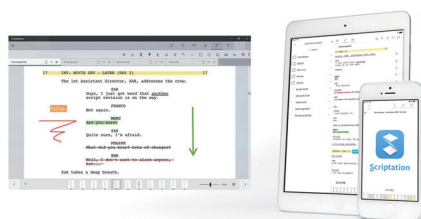
舞台監督にとって、きっかけを正確なタイミングで呼ぶことが重要なので、台本へのきっかけの書き方は各自工夫があるようです。オペラやミュージカルの場合は、歌詞よりも音符にきっかけを書くことが多く、きっかけだけでなく、スタンバイも呼ばなければならないので、スタンバイを言うタイミングもきっちり書いてあります。きっかけの番号も呼ばなければならないので、連続キューの場合は、きっかけの大分前に番号をお経のように唱えます（例：Stand by LX 照明 25、25.5、26 & 27、Followspot 31、32 & 33、Sound 15、16 & 16.5、fly cue 6 & 7、set cue...）。聞き取りやすい滑舌と反射神経、素早い決断力が求められる仕事です。余裕のある舞台監督は、公演中インカムで役者とともに歌っては、今日の彼らの仕草や出来栄をコメントしたり、観客の反応や行動にコメントしたりしています。スポーツのコメン

テーターになっても成功できそうなレベルです。よく周りが見えている証拠ですね。日本では、インカムで関係のないことをペラペラ喋ることは、きっとタブーなことでしょう。

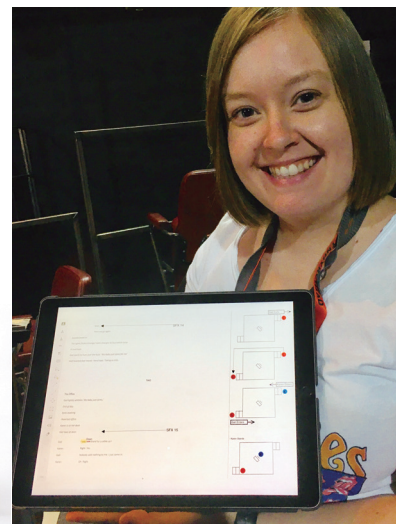
台本の話に戻りますが、先週はじめてデジタル (iPad) のプロンプトコピー制作に挑戦している舞台監督に出会いました。エコロジーに敏感な人が多いロンドンで、いつかは出てくるであろうと思っていた台本のデジタル化。電源や機械に異常が出たらどうするつもりだろう、と思う人も多いと思いますが、結局は照明卓も音響卓もコンピューター。落ちるときは落ちるし、バックアップも準備しての挑戦でしょう。誰でも、演劇に携わるときは、大量の紙を刷って台本を印刷します。そして、台本が修正されるたびに、全ページではなくても、大量に再印刷しているのが現状です。最近、光熱費の明細書や銀行口座通知書などもデジタル・メール化が浸透してきていますが、ついに演劇業界にもデジタル化が来たかと、感心しました。咄嗟にメモ書きできることが、紙の台本を使う利点だと思いましたが、各きっかけのセリフに定規を使って綺麗に線を引き、キュー番号を書き出す作業は時間がかかるし、きっかけの修正をするごとに面倒くさがられたりすることもあります。しかし、デジタル台本に挑戦していた舞台監督は、あっという間にきっかけやメモの書き取り、そして役者の立ち位置のアップデートをスラスラとこなしていました。それを見ると、デジタル化も悪くはないのでは?と思えました。特に、演出家が「誰々のあのセリフは何ページだ?」という質問に、デジタル検索で瞬時に応答していたのは、デジタルならではの利点です。興味があったので、ど

のアプリを使っているのか聞いてみたところ、「Scriptation」<https://www.facebook.com/scriptationapp/videos/meet-scriptation/1262818047178049/>というアプリを使っていると教えてくれました。使い方はAdobe Readerのように簡単で、立ち位置などを図式やタブレットペンで簡単に書き込めるイラストレーターのような機能もついていました。ネット上でデザイナーたちに、役者の立ち位置情報や台本の変更を即座にアップデートできるのもいいですね。

たまにコンサートなどに行くと、オーケストラが楽譜をデジタル化していて、足のペダルでページをめくるという光景を目にします。それがもっと普及すれば、いずれ照明家が、彼らのタブレットスクリーンの光量を均一に落としてもらえるよう要求するという場面が出てくるかもしれません。すべてをデジタル化にするのはどうかと思うし、それに心も体も乗っ取られる時間が多くなっているのは、今の我々の現状であるのは確かです。仕事を効率化できて良い部分があれば、人間らしさ、繊細さを失わせてしまう欠点もあるでしょう。照明でも、これだけテクノロジーが急速に進化し、その可能性を最大限に舞台に活かそうとする私たちにとって、バランスよく機械と付き合う方法を探り、新たな発見を見出すことが大事になってくると思います。



Scriptationのアプリ

デジタル台本を使いこなす舞台監督  
エイミー・ヘウレット氏